911.168
A92
8
911.168-Ka92-8ウ
1200500755589

始

~~744~~

788

911.168
KA92
8

川田順著

史歌 熱帶作戰

八雲書林刊

941
150

目次

皇軍頌歌（一五首）……三
大東亞戰頌（八首）……九
布哇海戰（一二首）……一三
摩尼拉陷落（一六首）……一七
陸軍始觀兵式（六首）……二四
クアラ・ルムプール（二三首）……二七
蘭印戡定（一一首）……三八

還　　暦（七首）……四三
滿剌加占領（一四首）……四六
支那事變を思へ（四首）……五二
ウェーキ島攻略戰（一五首）……五四
鹿兒島行（二七首）……六一
比島攻略戰（一六首）……七二
輸送船團（一四首）……八〇
馬來戰線斷片（一〇首）……八六
大密林行（八首）……九一
新嘉坡陷落（三一首）……九五

寺內將軍に呈す（五首）……一〇八
眞如親王（八首）……一一一
米本土砲擊（七首）……一一五
スラバヤ沖海戰（一〇首）……一一八
母の五十回忌（一二首）……一二三
滿洲國創建（四七首）……一二八
特別攻擊隊（八首）……一四九
蘭貢入城（九首）……一五四
雜　　詠（六四首）……一五八
熱帶海洋を想ふ（八首）……一八九

○卷末記……一九三

史歌熱帶作戰

皇軍頌歌

皇孫を守りて天降りし遠つ神久米命の荒魂づたふ

天降りにし神代の御軍まさきくて大和島根を今も護らふ

軍人に賜ひし勅諭われもまたいただき讀みぬ
國民なれば

汝等は朕が股肱と宣ひし勅諭かしこみかへり
みはせず

商人も農耕人も戈執れば日本をのこは皆いく
さびと

幼くて近衛聯隊の軍旗祭に行きしおもほゆそ
の軍旗祭

ぼろぼろに裂けし軍旗に幼なわれ怖れながら
も心躍りき

死ぬることたやすからめや武人は言擧をして
まさに行ふ

大君の任のまにまに戰へばおのづから業は神
業なすも

子を持たば皆軍人になさむとぞいひし吾が友
の言はうべなふ

奉天を奪りて幾らも時經ねば對馬の沖にふな
いくさ捷つ

眞珠灣に捷ちて幾らも時經ねば新嘉坡の要塞
を陷す

我等知る日露戰爭に强かりし御軍の力今日は
いや增す

日の本のみいくさ人の戰ふは皇みことの御名
に依りてぞ

大君はかい撫で給ひ國民(くにたみ)は信(おも)ひぞ頼むみいく
さ人を

大東亞戰頌

まつろはぬものは和爲(やはせ)と天降りにき神代も今
も史(ふみ)は貫く

われら曾つてたたかひし世々の戰爭(いくさ)をば集め
しよりも大きなる戰爭

大正の末の世相に現はれし國内の爭ひ夜良比
果てたり

久方の日の本つ國かがやかに洋の南へいくさ
を放つ

しきしまの大和の國の起つ時しみ空も海も陸
も響動もす

太平洋の波濤よりも大きく沸き激ちおきろな
きもの戰爭に向かふ

しきしまの大和ごころは昔より戰ふ時しあや
に光れり

今し我が起てば救はるる民族と倒るる國と幾
つか有るべし

布哇海戰

一月二日朝日新聞紙上にて、眞珠灣攻擊空軍の指揮官なりし某海軍中佐の談話を讀む

Z旗は今日し再びひるがへれり海のつはもの
ら見上げて泣きぬ

あらし吹くあかとき闇の洋中に搖るる母艦ゆ
機は飛び翔てり

布哇沖へ機は近づきしとおもふ頃たぐひなく
嚴かの日の出を迎ふ

突如として密雲やぶれ眞下にし海岸線見ゆ布
哇の島ぞ

浪の面を雷跡しろく走りしがすなはち艦は水
煙冲ぐ

高角砲を射つ間もあらぬ敵の艦ら一つ又一つ
水煙冲ぐ

われ奇襲に成功せりと第一報母艦へぞ打つ戰
ひながら

巨き艦の横腹裂けて噴き出だす重油くろぐろ
し灣にひろがり

くつがへりて赤き腹出す敵艦を後目にしつつ
機首めぐらせり

水煙冲げて傾く艦もあれば腹より重油を噴き
出す艦あり

この次はわれが撃つぞと二番機は悠々として
灣の空を翔ぶ

大きなる彈丸の痕ある翼には朝日をうけて我
が機歸れり

摩尼拉陷落

一月二日午後マニラ陷落、翌三日朝大本營陸軍部發表

摩尼拉陷つ摩尼拉陷つと吾がひとりごち朝戸
出するも雪の積れるに

わが門の南天桐の紅き實にふりおける雪氷り
つつあり

淨らかに雪降ると吾が眺めゐたる昨日の午す
ぎ摩尼拉は陷ちし

おもひでは嚴し旅順の開城と月日おなじくし
てこの報道聞く

東洋の眞珠と此處を亞米利加奴いしくも名づ
けて盜み占めゐし

盜まれし東洋の眞珠本來の持主にいまかへる
べらなり

十六世紀の西班牙の寂びは亞米利加のさわが
しき色に打消たれつつ

新らしき亞米利加の都市(まち)になりしより似(え)而非(せ)
紐育と墮ちも果てしか

マニラ市ルネタ公園を行進する皇軍戰車部隊の寫眞を見て、一首

たたかひし戰車は擬裝の棕櫚の葉の萎れたるままに街に入り來つ

南のうみ摩尼拉の街はくれなゐの焰(ほのほ)の木の花
今さかりなり

爆撃は過ぎて幾日の今朝もなほ軍用棧橋燃え
つづけ居り

岸ちかく爆(は)ぜ沈みたる驅逐艦のほばしら黄な
り朝波の上に

みいくさは攻めとりし都市(まち)瞰おろして熱帶氣
流の朝空翔べり

一月七日皇軍マニラに軍政を布き、比島政府書記官長ヴアルガスを市長となす

軍政布き辻々に我が歩哨立つ街は活きいきと
よみがへるらし

一月九日大阪城大手前にてマニラ陷落を豐太閤に奉告の式典擧行せらる

摩尼拉の陷落を大阪がいち早く豐太閤に告げ
たるやよし

慶長の豐太閤が夢みにし大きなることを今日
は現(うつつ)に

陸軍始觀兵式

一月八日

戰ひに征かむときほふつはものら大君の邊を
銃とり進む

大君の今日みそなはすつはものら戰(いくさ)の場(には)に明
日かも征かむ

諸兵指揮官の捧げ奉る刀の禮尖(さき)の鋭(するど)に朝日光
りつ

分列式に移る諸部隊うごきつつ劍(けん)光りさやぎ
靴のおと響(と)動(よ)む

大君のみそなはす陸のみいくさに空のみいく
さ來つつ響動もす

明治三年の軍神祭に始まりしこの觀兵式とこ
しへにもが

クァラ・ルムプール

一月五日マレー聯邦首都クァラ・ルムプールの攻略戰始まると報ず

クァラ・ルムプール馬來戰線の闘ケ原と大見出
しありわれ緊張す

密林すぎ山岳こえ濕地わたり來て此處のいく
さに事決めむとす

半島を日となく夜となく追はれ來し英軍もこ
こに蹈みとどまるか

縱深線の七重の守り一つ一つ蹈み潰し行く戰
車部隊なれ

一月八日

スリム河すでに越えしか然らずか讀みわきか
ねて亢ぶるわれは

敵の據る十里の線に八十時間攻むる力を集め
て烈し

一月九日

憂へつつ起きて讀む今朝の紙面にはクァラ・ル
ムプールといふ文字見當らず

伯林よりブエノスアイレスより倫敦よりさま
ざまに報ずこの戰ひを

斯くしつつ吾が居る時も刻々にタンジョン・マ
リムの決戰進む

このいくさ無くは名さへも知らざりしタンジ
ョン・マリム忘却せめやも

熱帶戰をおもふ昨日今日冬星のきらめき澄め
る夜々の續くも

摩尼拉陷つと聽きし馬來のみいくさはいやき
ほふらしこの戰ひに

一月十日

タンジョン・マリム隘路を一昨日の日暮れ時軍
先鋒は通過すと聞く

五日より攻めて八日の夕べには縱深抵抗線十
里突破す

英軍昨日クァラ・ルムプールを放棄すと某基地
特電のいふは尙早きか

一月十一日

朝刊來(こ)ばクァラ・ルムプール陷ちてゐむとあか
とき目ざめ亢(たか)ぶりて居り

大隘路の縱深戰線を突き破り野に出でし御軍(みくさ)
うしほの如し

一月十二日

一月十二日午後陸軍の公報出で確かにクァラ・
ルムプール陷つ

追擊、三首

セランゴールの平原を押すみいくさは奉天へ
向かふ乃木軍の如し

崩れ立ち亂れ退(の)きゆく敵兵に野は埋むらし熱
風吹きて

熱風のすさぶ野原に追ひ擊たれ敵野戰軍殲(つ)き
果てむとす

遺棄死體英兵印度兵のけぢめなくタンジョン・
マリムの風臭ふなり

クァラ・ルムプールを古隆坡と書ける支那文字
の美しさは吾が見逃がさざらむ

蘭印戡定

一月十一日海軍特別陸戰隊は蘭領セレベス島のメナド港に上陸す

馬來さへ遠しと思ひし戰ひはつひに赤道直下に及ぶ

南へと南へと進むみいくさの此處に上陸りて二千五百海里

己が政府は倫敦に逃れ國亡きにひとしきものを敢へて抗ふ

いにしへの東印度會社をなほ夢み富は持ちながら國は亡ぶる

我が國に親しみを持つ島びとの多しと聞きぬ
ゆゑは知らなく

メナドとは日本語みなとの訛りかといふ說あ
りて面白く聽く

メナドにはめづらしく噴く溫泉(いでゆ)あり陸戰隊の
垢を洗はな

首狩のアルフラ族も棲むとは聞け白檀にほふ
森(もり)林の島なる

人知れぬ熱帶多雨林の茂みにて老いし白檀朽
ちつつ香(にほ)ふ

一月十三日蘭領ボルネオのタラカン港を脫出せんとしたるプリンス・フアン・オラニエ號擊沈せらる

阿蘭陀も軍艦てふものの持てりしや沈められたるこの時知りぬ

メナド港の寫眞を見て

此處にても船もやひせる河口の港の景色かはることなし

還　暦

一月十五日還暦の祝とて家に小宴す

明治維新ありて十餘(とを)り五年(いつとせ)のこの月この日われは生まれき

若くして死なばよけむと思ひたる昨日は遠し
髪しろくなりぬ

兄も來て姉も來て祝(ほ)ぐ吾が壽(とし)を妻の居らぬか
も今日のこの日に

住友の務めも終り年來(としごろ)の妻にも死なれて今日
に到りぬ

古隆坡(コーランポ)陷ちし祝はむ吾がための芽出度き今日
といふはおほけなし

漸くにものの考へのおちつける吾が子を見れ
ばわれは老いたり

しづかにも老いむ念ひと老いずして生きむ願
ひと内に爭ふ

滿刺加占領

一月七日上海特電、敗退の英軍マラッカに集結中

葡萄牙の古びし城に苔生せるこの街もやがて
彈丸をくらはむ

一月十五日正午皇軍マラッカに入る、マラッカは最初の葡萄牙植民地なりき

澳門より友の贈り來し英譯のカモーンイスは
今日こそ讀まめ

己が國の植民地歌ひしカモーンイスは大きな
る記念碑を澳門に遺す

十六世紀の詩のなかにして永久に殘り現實の
街はさびれ衰ふ

太平洋印度洋の水に照る夜光蟲と歌はれし街
の燈の數減りぬ

蔦の這ふ十六世紀の城を殘し葡萄牙人ひとり
も居らず

フランチスコ・サベリヨは大友宗麟と會ひて歸
りて此處に死にけむ

江戸時代の日本人の墓もありと聞くをその名
は磨滅し讀めぬか

この街の古き教會の時計臺御軍入りしとき十
二時打ちぬ

福澤諭吉の萬國地理史にて吾が讀みし滿剌加
國に皇軍入りぬ

幾世々の亞細亞の民を殺しけむ古城の砲は街
へ向き居り

古城はカンナ咲く庭の牆外を今日のいくさの
人馬ぞ通る

守備兵の逃げし高射砲陣地よりしかばね臭ふ
灼熱の街に

一月十八日朝日新聞を見て

滿剌加陷落の記事を新嘉坡の肩へ一太刀と題
したるや佳し

支那事變を思へ

新聞の活字は小さく扱ふも支那のいくさに眼(まなこ)を凝らせ

長沙附近の戰ひに敵の遺棄死體五萬とありぬ
讀みなおとしそ

支那のいくさ四年(よせ)に餘る苦しびの今日酬いられて南方を徇(とな)ふ

香港陷ち摩尼拉落つる時も吾が友は蒙古ざかひに在りて聞こえず

ウェーキ島攻略戰

一月廿日諸新聞にウェーキ島占領の詳報出づ

艇に被る浪のみしろき午前零時接岸用意の命
令くだる

梯子降りて岩礁に足が著きしとき敵機銃彈浪
をかすめつ

敵陣は闇のなかにて近距離か浴びせ來る彈丸
の彈道低し

驟雨過ぎたる島の荒砂を匐ひながら進む手は
も凍てつつ

敵前二十米まで肉迫し灌木のなかに部隊長撃
たる

部隊長倒れて敵は未だ退かずすでに明け來し
午前四時なり

戰ひは六時間にして終り淡青の礁湖のおもて
小波しづか

珊瑚礁の湖淡青く湛へゐて四周は黒潮の波が
しら立つ

信天翁むれておりゐる岩礁は今朝のいくさの
彈痕多し

敵機捕獲

十二機の筈の戰鬪機一つ見えずけだし黑潮の
底にかも居る

一月廿日朝日新聞社特派員の見聞記によりて

亞米利加は蠅と鼠の棲む島を千五百萬弗もて
要塞にしつ

亞米利加の兵舍の壁は貼られたる女の寫眞い
まだ剝がさず

富み足らふ國の造りし島堡壘我がつはものら
の目を駭かす

足らぬ物のあらぬ兵舍に起き臥していのちを
棄つる戰爭は難し

この島をすておかば從此敵機飛び東京銀座歩
く人無けむ

鹿兒島行

海山の見が欲し國の薩摩には亡くなりし妻の
兄を誘ふ

このあした關門海峽越えむとし國内ながらも
心ぞ緊まる

このあした三年ぶりにて吾が越ゆる關門海峽
冬潮速し

畏くも香椎の宮の鳥居邊を響動もしてこの汽
車は過ぎゆく

香椎潟多多良の濱のいにしへは常よりも今日
わきて偲ばゆ

此處までも寇の來る時あらむとぞ築かしめた
る水城は高し

蒙古勢まさに上陸りて太宰府まで迫りしこと
のあるを思へよ

慮り遠くもあるか新羅こそ來ずはありけれ
蒙古來にけり

これやこの肥後の田原坂丘の上に記念碑立つ
と見し間にも過ぐ

鹿兒島のあたたかきことは知れれども二月の
六日蛙が鳴ける

薩摩には數年の間に三たび來ていつも朱欒の
黄なる時なり

夕陽さす市街のむかうにそそり峙ち櫻島山け
ぶりが多し

錨鎖斷ち英吉利艦の遁れしはこの灣なりきと
おもひて對ふ

安政の薩摩大守が遺したる日記を見れば羅馬
字使ふ

二月八日笠沙聖蹟歌碑の除幕式に臨みて

目交(まなかひ)を黑しほ流るこの潮の湧きおこるところ
戰爭酣(いくさたけなは)

この岬海を隔てて揚子江の河口(かこう)にむかふと聞
くは大きし

岬には薩摩野菊の時すぎてしかすがに荒き浪
ぞけぶらふ

高千穗は雲居たなびき笠沙には黑潮來寄る神
代ながらならし

芬蘭土を蘇聯の兵の攻めし頃ここに泊りつこ
の前の旅

神(かむ)さびし笠沙みさきに復(ま)たも來つ短きものと
生(よ)を思はむや

鹿兒島市滯在中稀有の餘寒に襲はれて

鹿兒島にめづらしき今朝の寒さにてくろがね
もちの實の色は冴ゆ

吾が兄は霧島の谿歩き來て大きなる氷柱(つらら)のさ
がりしを言ふ

大隅國垂水に渡る

峯尖(とが)り火口あらはなる櫻島大隅に來てぞ見る
べかりける

海うづみて大隅の國と續きたる櫻島熔岩の上
をわたりぬ

安永の噴火のあとは松茂り大正の熔岩ただく
ろぐろし

大正の熔岩はなほ硬けれど時として生ふるや
しやぶしを見つ

地熱持てる熔岩原はそちこちにやしやぶしの
芽の青みつつ居り

比島攻略戰

バタアン半島攻撃

戰ひつづけ摩尼拉に入りしみいくさは島要塞
を卽日より攻む

米軍司令官マックアーサーがゲリラ戰を呼號す
といふ記事出づ

アギナルドは山岳に據りて三年戰ひきをこが
ましくも倣はむとすや

マニラ・バギオ間のケノン道路は日本人の勞働
によりて開設せられたるものなり

日本工夫八百人の菩提塔供華もなくして幾世
すぎけむ

一月十一日大阪毎日新聞社特派員はアギナルド
將軍をカヴィテ軍港近郊の寓居に訪へり

アギナルドの隱棲處訪ひし記者ありて一問一
答目に睹るごとし

年老いし革命將軍霜ふりの背廣服にて記者と
對へる

燃えあがるバタアン半島の兵火は將軍の家の
窗に照りつつ

ありし日の革命將軍老いながら兵火に向けし
眼はもするどし

アギナルドは日本を未だ見ずといふ來しと聞きしは吾が誤りか

一月十八日朝日新聞に特派員發バタアン半島記事出づ、「カヌヤン岬とマスマニ岬に挾まれ、遙な沖合にはグランテ島要塞が竹生島のやうに浮んでゐる」云々

竹生島と一行讀みて知らぬ海の要塞の狀はつきり浮かぶ

敵要塞沖に眺めて竹生島をおもひし記者は近江の人かも

灼熱行三首

兵の被る芭蕉の葉にも馬の著る椰子の葉にも熱き風が日ねもす

くれなゐの焔(ほのほ)の木の花陽に燃えて眼鏡蛇(コブラ)の棲
める島は冬無し

とろみたる海のおもてに今夜(こよひ)照る月の光(かげ)さへ
熱(ほ)めくをおぼゆ

コレヒドール未だ陷ちずと或人のつぶやきし
時われ憤る

おのづから時期(とき)の來て勝つ戰ひを己は急ぐら
しふところ手して

バタアン半島戰況の中に

前線に給水筒を運びつつあはれ嘶けり日本の
馬

輸送船團

馬來上陸軍の大輸送船團を想像す

柬埔寨(カムボチヤ)の岬過ぎたる御船(みふね)らは大きく舵を西へ
枉げけむ

赤道より僅か八度の北にして灼くる船艙に軍
馬の臭ふ

長政が荒海こえししやむろ丸このあたり迄に
百日(ももか)すぐしぬ

慶長の御朱印船は商人と女と乘せて此處を通
りき

つはものら馬來半島に上陸(あが)るとは柬埔寨岬を
過ぎて知りけむ

すでに北の蒙古ざかひに戰ひ來し兵も居らむ
か南へ向かふ

銀河中の暗黑星雲に間近くて南十字星かがや
きにけり

慶長の御朱印船の乘り手らも俱留砌呂(クルセイロ)と呼び
てこの星を知れりき

南十字星にながむるつはものら見えずなりた
る北斗を戀ひむ

夜ふけぞら奇(あや)しく澄みて星夥(おほ)し熱帶の海を航(ゆ)
きのひそけく

船團に添ひて列(つら)なし浪を衝くみいくさ艦(ふね)も搖
れは大きし

馬來をば一擊にせむつはものら今はこの船に
いのちを托す

つはものら濁れる海は見馴れ來てメナム河の
吐き出す黄土(つち)と知りけむ

みいくさは山田長政が封ぜられし六昆よりも
南に上陸(あが)りぬ

馬來戰線斷片

マレー北部の皇軍上陸地點を想ひて、一首

砂原に幾日も消えず殘るらむ上陸軍の靴の痕(あと)
はも

かかる時代(とき)來むと思(も)ひきや彼南(ナン)にも日本語學
校すでに開かる

しきしまの大和言葉は神代より受け繼ぎて今
日馬來に教ふ

東海岸くだる御軍(みくさ)のパハン河を未だ越えぬは
雨に惱むか

熱帶の多雨林征くとみいくさは戰ふことのほかも苦しぶ

クアンタン占領

その沖にて主力艦二隻撃ちとめしクァンタンの部落陸よりも陷す

一月十五日朝日新聞にて幹本嘉璋伍長の壯烈なる戰死の狀を讀む、一首

幹本伍長右眼撃たれてたじろがず左眼がありぞと叫びけらずや

何ぞ夫れ善哉戰車の砲塔に八幡大菩薩の旗ひるがへす

象に乘るは普賢菩薩にあらずして帝釋天の如
き我が兵

兵火のいまだ消えざる街にして華僑の店舗は
商賣を始む

大密林行

マレー東海岸よりパハン河の上流を西へ横斷せ
し難行軍を想ふ

この密林初めて蹈むはひむかしの日本より來
しつはものらの軍靴

日の本のやまとの兵のたふとき血を馬來密林
の山蛭が吸ふ

蹈みたどる密林の闇おきろなし樹の壁立つも
樹の壁立つも

鬼蔓のおのづからなる鐵條網大密林の樹々を
絡めつ

或時は鰐のそびらを蹈みつけて泥沼のなかに
まろびし兵あり

或は又夜光蟲かと寄りゆきて鰐のまなこにお
どろくことあり

蹈みわたる沼の毒氣に耐へつつも新嘉坡にて
使用せむ架砲を擔ふ

神日本磐余彦尊眞熊野を蹈み越えましき他に
例無し

新嘉坡陥落

このいくさ必ず勝てと遙拜み皇御軍にわれは
乞ひ禱む

新嘉坡屠るは御軍の將兵の一つの意志となり
てひた押す

密林地帶風のごと疾(と)く蹈み來しもこのくろが
ねの意志の現はれぞ

豪華の島に射ち込む砲(た)彈(ま)は土ゑぐり花の鳳凰
樹も根こじに飛ばす

侵略の象徴ラッフルスの銅像は初彈くらはせ
て碎きてしがも

二月九日ジョホール水道敵前渡過

靴のおと忍ばせて岸へ消えて行く隊列黑し午
前零時を

上陸部隊の先鋒船に乘らむとし天の川しろく
輝きにけり

太平洋印度洋つなぐ水道をいくさ渡るは史(ふみ)に
例(ためし)無し

爆破せし陸橋のしたは泡立ちてマラッカ海峡
より潮さやぎ寄す

二月十五日鹿兒島地方の旅行より歸來す、翌朝
大本營の公報を讀みて

高千穂の峯仰ぎ見てかへり來しその日のゆふ
べ新嘉坡陷つ

新嘉坡陷つといふ以(ほか)外にこの暫時(しばし)意識に上(のぼ)る
何ものも無し

新嘉坡の島に上陸(あがり)て今日までの七日七夜は
息も繼ぎあへず

のた打ちし植民地軍つひに今日止め刺されて
屍を曝らす

東亞細亞諸民族いまは久々に呼吸し得べくも
咽喉くつろぎぬ

新嘉坡陷ちしすなはち目交に印度洋見えて妨
げもなし

新なる世界の歴史始まると今日し我等ぞ言擧
はせむ

勝つことは勝つと我等は疑はねこの神速さ誰
が想はむや

白旗ささげ敵の軍使の來にしとき旅順開城を
皆おもひけむ

共後詳報にて俘虜七萬三千と知る

新嘉坡に七萬の兵を捕虜にす奉天にては三萬
なりしか

七萬の兵を擁して降伏す善く戰へりとチャー
チル言はむか

我が軍の死傷いくばくぞこれのみを憂へたり
しが三千と知りぬ

第二軍南山の敵を攻めしとき死傷五千とあり
し思ひ出づ

バーシヴァル英軍司令官が無條件降服書に署名
する情景の寫眞及び彼我會見顚末の記事を新聞
紙上にて見る

無條件降服か否か一喝せられ諾々々と三たび
答へつ

無條件降服の書に署名する敵司令官の顏は視
るべし

膩汗冷汗すらし署名する英軍司令官は上衣脫
ぎたり

この際にも婦女子のことを哀願すここに彼等
の人道は在るか

降服せし英軍司令官の眉根にはステッセルほ
どの嚴しさを見ず

ステッセル將軍に寄せし同情を新嘉坡司令官
へ我等持ち得ず

敵ながら天晴(あっぱれ)といふ印象をわれら日本人は期待す

二月十八日祝賀の街を歩きて

遼陽陷落の提燈行列に死傷者のありしを思(も)へば今日は靜けし

昭南市博物館公開、獏も居りと聞きて

海峽植民地總督の夜々の惡夢をば喰らひし獏の面構(つらがま)へ想ふ

寺内將軍に呈す

二月十五日の夜、南方方面帝國陸軍の最高指揮官は陸軍大將伯爵寺内壽一、同総參謀長は陸軍中將塚田攻と大本營より發表せらる

歴史的の人にしいます今にして師團長時代の
君がなつかし

鐵兜かぶれる君は在りしごと微笑みにつつす
こしも老いず

曾つて賜びし手紙の末に描かれたる君が繪の
技倆もなみなみならず

ちちのみの父の子なれば千萬のいくさ統率ひ
南方を徇ふ

遼陽に寺内大尉たたかひて危かりしをいまも
健在

眞如親王

新村出博士に教へられて此の數首を作る

蹲踞太子とは誰が申しけむ入唐渡天企てたま
ひき

日の本のやまとの國の親王にして渡天思し立
ちき千年の前に

渡天せし親王の御壽を七十とも八十とも聞く
は畏きろかも

虎に遇ひてかくれ給ふと書きたるは例の撰集
抄われも信ぜず

羅越國に著き給ひて後聞こえざる親王のゆく
へは佛のみ知らむ

羅越國は馬來南端にちがひなしと重山博士疑
はず言ふ

佛の道求めて行きし我が親王と侵略者ラッフ
ルスとおもひ比べむ

新嘉坡に親王の記念碑建てよと書きし博士の
文を今日にして思ふ

米本土砲撃

二月廿四日帝國潛水艦は米國加州沿岸の軍事施設を砲撃せり

我が潛艦悠々と二十五發射ちしばらくはなほ
夕波に浮かぶ

米本土に一海里まで近づきていたくおちつき
し攻撃ぶりはや

ふためきし加州漁師の碧き眼には巡洋艦の大
きさに見えつ

紐育市廣告燈を消しにけり其處まで彈丸(たま)はと
どかじものを

ルーズヴェルト爐邊談話の放送はこの砲のお
とに滅茶苦茶となりぬ

ルーズヴェルトよ戰場遠しと言ふ勿れ眞珠灣
の次は加州となりぬ

浦賀に來て德川幕府を威嚇せし九十年前と世
は異なりぬ

スラバヤ沖海戰

二月廿七日より三日間に亙る海戰にて米英蘭濠聯合艦隊を撃滅す

彼我の距離いまだも遠し眞晝間の熱帶の海を
航きに航くはや

偵察機の發見せし敵艦隊に六時間の後我が主力遭ふ

昔より我が海軍の得意とする近距離夜間戰に
なりにけらずや

熱帶のうみ金色光の月出でて敵艦隊の最期を
照らす

照る月の金色光をつらぬきて阿蘭陀の艦(ふね)かも
火柱を冲(あ)ぐ

亞米利加も濠洲も逃げて置き去りの阿蘭陀の
艦かも火柱を冲(あ)ぐ

敵の艦幾つか葬(はふ)りし海の上(へ)にあかとき近み曉(にはか)
雨(あめ)來つ

寄せあつめの四國艦隊逃げ沈みばらばらになり
つ夜は明けむとす

三月一日英艦エクセター擊沈

沈みゆく際(きは)まで檣頭にひるがへし敵ながら善
しその戰鬪旗

艦尾より沈みゆきて右舷に傾けりレパルス號

も然かなりしか

母の五十回忌

三月一日生母の五十回忌を洛東法然院にて營む

柞葉の母いまさずて五十年の今日を吾が生く

現しけもなし

この次の七十五回忌まで生き残るわれならむ
やも香を炷きける

十餘り二つの歳の幼なわれ死に給ふ母を泣か
ざりしかも

祖母(おほはは)の嘆かすなべにいわけなくこの妹(いもうと)人の泣
きし思ほゆ

幼きを二人遺して死にゆきし母のこころは想
ひ得むやも

消(け)残る雪青桐の根に凍りつき母の葬(はふ)りの日は
寒かりき

根岸より駒込まで行く葬列はさびしかりにき
父見えまさず

おそらくは駒込吉祥寺のみ墓には今日まゐる
人ひとりもあらじ

在りし日の母のいのちのさびしさを想ひ得る
までわれ老いにけり

庭に佇ちし或日の母の面影は五十年後の今日
まで消えず

美佳子はも母にし似ると皆の言へど六十歳の
老になりにけるかな

浅草の江崎の寫眞消えむとす美しかりし人と
聞きしを

滿洲國創建

昭和七年初春奉天府に淹留して滿洲建國の實狀を觀察しぬ、十年後の今日追想して詠める歌

下ノ關まで第三艦隊司令官と夜汽車おなじく
す眼(め)はも冴えつつ

吹雪の海を吾が航(ゆ)きむかふ滿洲に新(あら)たなる國(くに)家
興りつつあり

二月七日

氷析(さ)き大連港に船著きし今日しも支那の元日
なるか

大連にて紀元節を迎ふ

植民地の忠靈塔に氷柱(つらら)ゐて海兵一大隊分列式す

二月十四日奉天行列車中にて

得利寺の山なかにして橇に乘り氷れる川を人うちわたす

曠野(あらの)黍(きび)いまだ芽吹かず興安嶺の樺の林に雪散るらしも

奉天府滯在中

關東軍司令官室の壁の上に神は祀れり拜みて
出て來

關東軍司令部の玄關出でしとき氷の如き空氣
に觸れつ

氷點下十八度の朝をたもとほり趾は痺れつ北
大營に

侮りを怺へ怺へて九月十八日柳條溝につひに
爆ぜたり

吉林督軍凞哈の一行ひそやかに著きし夜ふけ
を月さやかなり

張景惠哈爾濱特別區より飛來せしこの夜も月
のさやかなるかな

馬占山果して來しか然らずか奉天會議の今日
を噂す

微笑は不斷浮かべつつますらをの板垣大佐多
く語らぬ

建國會議始まりし日を旗亭にて河本大佐とわ
れと酒飲む

斯の人や中尉の頃に駐在せし成都の春の海棠
を言ふ

事の動きおもひのほかに靜かにて新らしき國
家創られゆくらし

吾が識れる張作霖は日本を侮りしゆゑにいの
ち殞しき

吾が知らぬ張學良は若くして思ひあがり終に
此處を逐はれき

二月廿一日哈爾濱に著く、感冒のため發熱して
一週間旅館に閉籠る

此處を見て吾が旅行きは果てむとす氷る大河(たいか)
に突きあたりたる

領事館應接室の敷物は吉林の虎の皮を剝ぎた
る

馬占山と會ふべく來にしわれにして松花江の
氷る寒さに風邪(かぜ)ひく

感冒癒えて松花江の氷上に遊ぶ

遙かなる向かうの岸まで張りつめしいちめん
の氷よどれてを見ゆ

洗禮祭の氷の十字架なほ立てる河の上へにして
橇して遊ぶ

松花江のただなかにして橇を棄て厚き氷の青
き踏み行く

對岸より氷を踏みて兵きたり隊長は獨り馬に
騎りたる

橇ひとつ赤き帽子の露西亞婦人氷のうへを遙
か行きたる

二月廿九日哈爾濱を去りて再び奉天府に入る、
漸く春色あり

滿洲に二十日餘りも居りしかも雪消え赭土あらはれきたる

國創(はじ)むる曠(あら)の野の原は春まけて楡の木群(むら)の上枝(ほつえ)青みぬ

高粱(カオリヤン)のいまだ芽吹かぬ曠野原もののいのちは土にこもれり

肅愼といひ靺鞨といひ女眞といふ民族らも此處の黍食(きび)みて興り亡びぬ

三月二日

吾が會ひし奉天市長某は才子にて省長臧式毅は政治家なり

旅館にて鄭孝胥先生の訪問を受く

滿洲國最初の總理に擬せられて鄭先生はいつもの如し

詩人にて終るは世相許さずか老先生のこころをおもふ

三月三日旅館にて張海鵬將軍と面會す

會議に來て張將軍はいとまあれや隣室のわれを今朝もおとなふ

張將軍すでに眉しろし東京に愛兒を留學せしめむと言ふ

蒙邊督辨陸軍上將張海鵬も馬占山には苦しみ
しかも

三月六日某所にて宣統帝を拜す

侍者すくなく歩み來ますを拜みたり丈高にし
て眼鏡かけ給ふ

白き髯かき垂りて清く痩せたるは羅振玉先生
と吾が疑はず

三月九日長春にて建國式あり、この日大連より
歸航の途に就く

滿洲は建國式の今日の日を歸航(かへり)の船にわれ乘
らむとす

新らしき國家にも歴史はすでに在りて愛親覺
羅氏を執政となす

靺鞨や契丹の建てし國とは同じからずうしろ
を日本の支ふるあり

外蒙古の沙漠黑龍江の結氷を境界となして國
建ちにけり

おもひやる黑龍江の厚氷勞農露西亞は踏み越
えて來るか

興安嶺の此方に建ちしこの國家はおのづから
日本の北を固むる

倫敦も巴里も知らね滿洲に幾たびか來しわれ
を悔いずも

始年號大同元年の三月に滿洲國にわれ居りし
かも

特別攻擊隊

三月六日午後大本營より布哇特別攻擊隊のこと
發表せられ、翌朝の諸新聞に九軍神の略傳及び
寫眞掲げらる

先づ思ふは九柱(ここのはしら)のいくさ神田舍に生まれし人
ばかりなり

還り來ぬ九柱のいくさ神おほかたは老いし母
持ちたまふ

畏きやいくさの神の母達は蠶養ひ繩綯ひ或は
畑打つ

三月十一日朝日新聞に、上田定兵曹長母堂の勞働せる寫眞出づ

いくさ神の母にはいませ働くと材を運ぶ背の
屈まりたまふ

昔も今もかかる母ありて敷島の大和男子は育
つとを知れ

岩佐直治中佐

九歳(ここのつ)にて大利根川を泳ぎ切りしその氣魄(たましひ)や眞
珠灣を撃つ

追憶

旅順閉塞隊遡りては威海衛の防材乗り越えし
艇隊もおもへ

威海衛襲ひし水雷艇隊を知らざる人のやうや
く多し

蘭貢入城

シッタン河渡河戰の後

死骸を食ふ赤き頭の禿鷹のシッタン河に群れ
てゐしかも

死骸を食ふ禿鷹の群れし野は過ぎて佛のいま
す都市近づきぬ

綠樹の上に金色佛塔見え初めてみいくさびと
の擧げし聲はや

三月八日午前皇軍ランゲーンに入城す

み佛は戰爭のなかにも儼在しシュウェダゴン・
パゴダ金色光放つ

新嘉坡ラッフルス銅像引きおろされ蘭貢佛塔
はいや光增す

侵略者は百二十年のいのちにて佛は永劫に民
族と在す

ひむかしの日本の兵らみ佛の國はことむけて
み佛はうやまふ

英吉利と三たび戰ひて滅びたるアロムプラ王
朝を佛も憐れめ

日章旗の光のかげに寄り來らし孔雀を描きし
獨立義勇軍の旗

雜　詠

英地中海艦隊司令長官アンドレー・カニンガム
は新年劈頭旗艦の司令塔上にて亞米利加海軍の〳〵
無能を痛罵せりと傳ふ

池の如き地中海の奥に潛みゐて戰ひをいふ言
は易(やす)けむ

己(し)が旗艦の司令塔にてたたかひの方略(てだて)は練ら
ず味方を罵る

ネルソンの後にネルソンはなかりけり王室海
軍の旗風衰ふ

一月五日大阪毎日新聞にて「密林に愛機護つて
六日間」の記事を讀む、タイ・ビルマ國境山中の
出來事

紫檀の樹を大蜥蜴這ふ蔭にして大和男子(をのこ)も一
夜眠らず

狼を聽き明かしたるつはものは朝の溪間の孔
雀におどろく

密林に餓死(うゑじに)を待つ兵の眼にも五色孔雀はうつ
くしと見つ

一月六日朝蘭貢空襲

蘭貢を擊ちて歸りしみいくさは印度洋のいろ
の濃きも見つらむ

蘭貢より阿羅漢山脈ひと飛びに印度を襲ふ時
も來(こ)ぬかも

一月八日平出英夫大佐の「世界を開く日本」といふ講演を聽きて

善いかな海軍報道部の大佐こゑ擧げて死ぬことよりも勝つことを言ふ

リスボン特電によれば一月十三日英蔣聯合軍と我が守備隊とタイ國境に衝突す

寶庫(たからぐら)印度につかむ火を消すと蔣介石は傭はれにけむ

一月十五日朝日新聞にてビルマ爆擊座談會の記事を讀む

高度たかく翔べば操縱桿手に凍(し)みて熱帶の空も蒙古の如し

眼に見えて白き馬多し國境越え重慶の軍入り
つつあるらし

タヴォイの東を翔べば故郷の木曾川の谷に似
てを愛しむ（宮本曹長曰く）

一月十六日橋本關雪畫伯の邸に招かれて

片解けし薄氷に吾が影うつり池の飛石わたる
と寒し

枯庭通り坐りし茶室は床の間に元人の書幅墨
淨らなる

戰爭に亢ぶるこころひとときを閑かになりて
冬の林泉と對ふ

畫たけて池のうすらひ解けながらかたまり潛
む鯉は動かぬ

池の面はうすら氷とけておほどかに泳ぐ白鳥
影をともなふ

火焔負ふ愛染明王の繪を觀たる畫室は今日は
片づきて寒し

一月廿日朝雪ふる

樫の葉に小竹の葉にふるしら雪のたまるすな
はち氷りつつあり

わが庭のつくばひのみづ氷れるを山の小禽の
知りて今朝は來ず

馬來にて戰ふ友はこの降れる冷たきものを戀ひつつあらむ

雪後大阪行の車中にて

京都離れ天王山の山崎を過ぎて殘れる雪多からず

斑(はだ)らにも雪の凍れるを見て過ぎつ櫻井驛の樫の木群(こむら)に

雪ぐもり灰いろふかき街空のはてに大阪城の天守を探す

腦溢血にて倒れし妻を憶ふ

妻と食ぶる最後の朝餉と知らずしていつもの
如くいそぎたりける

立春の頃

さしなみの隣の幼な兄弟は水兵服を著てを愛
しも

この時を我がつはものら遠征きて冬も春も無
き土地に戰ふ

偶感

おのづから土を眺むる吾が眼には散りたる紅
し山茶花のはな

今までは此處見にけむ我が國の歴史をいふ人
俄に多し

未知南洋、某倶樂部の午餐會にて

南十字星の光は白きか將た青きかと問へど誰
れも答へず

摩尼拉にて今頃鳴くは何鳥か花はと問へど誰
れも答へず

太平洋にて最も高き島火山を觀しかと問へど
誰れも答へず

彼南には檳榔樹繁に茂るらむ然りやと問へど
誰れも答へず

馬來人は獨木舟(うつぼぶね)榜ぎ海ゆくを知るかと問へど
誰れも答へず

暹羅の古都アユチヤを想ふ

長政が來し時尖塔輝きゐし四百の寺院(てら)は皆殘
らずか

關ケ原の落武者も來て土著(どちやく)せし日本人町跡も
あらぬか

ビルマ路遮斷と蔣介石

彼れ今は西藏經由を夢みるか玄奘三藏にあら
ぬものゆゑ

二月廿三日、庭に來し鶯の初音を聽く

しきしまの日本のほかには居らぬ鳥鶯啼きぬ
この朝明を

季節の推移あらぬ南の島々はいかなる鳥の鳴
くらむぞ今

馬來の岩山に棲めるは保護色にて孔雀といへ
ども美しからず

摩尼拉の街夜ふけて歩哨に立つ兵は壁虎の鳴
くを聽くといふものを

鶯の來啼く春べとなる時し海外の御軍いよよ
遠征く

薩州枕崎の今給黎俊一大尉は蒙疆方面某地にて自爆戰死す、その石碑に刻むとて

隼人の薩摩男子はいさぎよし蒙古の空にわれと爆ぜにき

三月一日大本營の發表によりて、スラバヤ沖・バタヴィヤ沖兩海戰の戰果を知る

太平洋の西に南に狩り盡くし殘る艦なきはさびしかりけり

病友の入院せるを雨中に見舞ふ、一首

晝食時病棟三階の廊下まで魚を燒きし煙こもれり

十月より眼にはつきつつ我が門の南天桐の實
半年紅し

哨戒機夜を飛ぶ見れば中空の昴星かすめて北
斗へ過ぎつ

落下傘鰐の背の上に降りしとふ信ずべからざ
ることを信ぜむ

われわれが持ち古るしたる知識とはいまの戰
爭は全くちがふ

三月六日、大和の櫻井高等女學校にて講演す

大和に來て高等女學校の生徒らに戰爭の和歌
の由來を話す

三月八日皇軍バンドンに入城して蘭印撤定の完成せしことを翌九日大本營より發表せらる、敵軍十萬無條件降伏云々

十萬人袋にものをとるごとし蒙古の兵は三人(みたり)逃れき

きくならく忽必烈(クビライカン)汗も日本に敗れたる後此處を攻めにき

日本に敗れたるごと忽必烈は此處にも負けて跡をとどめず

陸軍記念日に

蘭貢もバンドンも陸軍記念日の今日に迫りて陷ちにけるかな

奉天の捷戰と今日の捷戰と一つになりて國內
響動もす

渡るべき渾河の氷融けぬ間と攻めはじめけむ
時を考へて

彼の時はクロパトキンもしかすがに豫定の退
却とは言はざりしかも

三月十二日滿洲より舊知太田外世雄來る

奉天より今日來し友に吾が訊けば渾河の氷融
けはじめたり

三月十三日深夜、東大寺二月堂にてお水取行法
を拜觀す

國擧(こぞ)り戰ひながら奈良には今日天平の寺の古
式もおこなふ

禮堂(らいだう)は油火ゆらぐ夜莊嚴(やしやうごん)ふけて行くほどいつ
くしきかも

後夜近み眠くなる時し内陣に駈けりの行(ぎやう)の荒
き沓の音(と)

京都の餘寒嚴しきに

未完成の十二間道路吹きとほる鞍馬おろしを
突つ切りにけり

肉親の一人は北滿洲に屯し、一人は新嘉坡方面
へ征く

暑しといふも馬來にあらず寒しといふも牡丹
江にあらぬ吾が起臥(おきふし)や

熱帶海洋を想ふ

事無かりし赤道の洋(うみ)の海若(わたつみ)は眠りつづけて幾
億年か

釋迦牟尼の生まれし大陸(くが)の岸を洗ふ濃藍(こあゐ)の洋(うみ)
は凪ぎ久しかり